

静岡県知事賞

みとめあうことから始めよう

磐田市立磐田北小学校 四年

相馬 隆之介



ぼくの住む街には、人と自分に一日一善とキレイな字で書かれた白色の旗が立っている。ぼくが通う小学校にも、その白い旗が手招きするように風にゆれている。ぼくはいつも、旗の横を通るたびに、むねの辺りがズキンとする。

去年、ぼくは小さな親切運動のフォーラムに出席した。その時に様々な人達の小さな親切を知った。ぼくにとっては小さいどころか、大きな親切であふれていて、自分がはずかしかった。だってぼくは、人付き合いが苦手で、うまく話せなくて、それ

をからかわれるのがいやで、自分を守るために相手をすきか苦手か区別しようとするクセがある。そんなサナギのようにならずに、まっすぐが、どんな人にも親切になんて出来っこない。だから、ズキンと痛むんだ。

そんなぼくにお父さんが、オーストラリアへホームステイに行かせてくれた。何でもまず経験して、心を強く持てるように、今のぼくの世界は小さくせまいけれど、世界は広くて決して一人ではないと感じるため、だって。



静岡県知事賞

誰でも楽しく、わかりやすいように

静岡県立中央特別支援学校 中学部 二年

川崎 涼加



「誰でも楽しく、わかりやすいように。」これは、私が学校生活で日々意識している言葉だ。私には生まれつき身体に持病があり、今は支援学校に通っている。実はこの言葉は、支援学校に通っていないと、知ることができなかったかもしれない言葉である。

昨年、一年生のとき私は学級委員をしていた。毎日仕事をしたり、人の前で発表する機会も多くあってとても充実し、やりがいを感じていた。そんなある日、当時私の担任だった先生か

らあるアドバイスをいただいた。それは、大勢の前で何か言うときには、絵やジェスチャーを多く用いたらどうか、ということものだった。

「目が見えにくい人や耳が聞こえにくい人もいるから、誰にでも楽しい、わかりやすいと思ってもらえるような伝え方が良いですね。」この言葉に私は深く感銘を受けた。入学してまだ、他の人の状況をよく知らなかった私は、声のスピードやトーンには多少気をつけていても、相手の気持ちになってどうすれば

わかりやすいのかを考える思いやりには大きく欠けていたのだ。そのときを境に、私は伝え方というものについて少しずつ工夫し、考えを巡らせるようになった。例えば、絵を描いて伝えること一つをとっても、どれだけ単純化して内容を正確に伝えるかに力を尽くした。先生は私の発表をよく見てくださり、そのたびに改善点を具体的に教えてくださった。そのおかげで、私の伝え方は自分でもわかるほどに上達した。次第に同級生や先輩からは、

「お知らせ、わかりやすかったよ。ありがとう。」

と、声をかけられることが多くなった。〆わかりやすいよ。ありがとう。〆。そういった言葉は私にとってとても嬉しく、自信に繋がった。そして、照れくさくも心が温まるものだった。

二年生になって私は今、生徒会の役員を務めているが、それは今でも変わらない。どんなに忙しくても、誰にでも楽しい、わかりやすいと思ってもらえるような工夫を日々仲間と模索し、集会や生徒会企画のレクリエーション等に生かしている。だから最近では、それを考えることは私の一つの習慣になりつつもあり、これからも続けていきたいと思っている。少し相手の目線に立って表現や伝え方を工夫すること、これは決して簡単なことではない。しかし、自分が理解できるものであったらそれで良いのだろうか。その小さな親切や思いやりは、誰をも笑

顔にする大きな力を持っているのだということを心から気付かされた。

世界には様々な人がいる。私はこのような行動と思考を、思いやりとは思わず、どんな人に対してもあたり前にできるような人間になりたい。

